

或る戰國武士の自叙傳 (下)

——玉木吉保の身自鏡の研究——

文學博士 三 浦 周 行

戰史の史料として(續)

高松の城攻についての本書の記事は多少の誇張がある。秀吉が大きな堤防を築いて水攻にしたのは言ふ迄もない事實であるが、敵味方共各十萬餘騎で對陣し、日夜合戦止む時なかつたといふのは斥候戰にしては大袈裟過ぎる。「羽筑陣切崩サレンコトハ案ノ内ナレ共、味方ノ表裏ノ輩共、羽筑へ密通ノ由風聞人口ニ在ケレハ、一戦ニ不得勝利ハ一陣破テ殘黨不全ト云ヘハトテ互ニ睨ミ合テ御座有ケル」とある後半の、毛利側に内通者があるといふ噂の高かつたことも事實で、毛利が最後の總攻撃の鈍つた一つの理由と看做されて居た。主従

關係の割合に薄弱な當時にあつては味方同志相疑うて不安の念にうたれ勝で、毛利の爲めに忠誠無二の清水宗治でさへ、初は主人の隆景に念をおされ人質迄取られて居る。そこに敵の誘惑や反間の入る餘地もあつた。秀吉が備中一國を餌に宗治を釣らうとしたのもそれを裏書して居る。

去年鳥取を取られ、今又高松が危いと見た毛利は危急存亡の秋と、兩川は精銳を悉くして岩崎に陣取り、輝元も猿懸に本營を進めたから、秀吉も京都に應援を求めて、信長自身出馬することゝなつた。とはいへ毛利の援兵は時機既に遅れて高松は水中に没して居た。秀吉が

兩川のひとつに成て落ぬれば毛利高松もゝく
つにそなる(秀吉事記)

どの一首の狂歌を以て味方の士氣を鼓舞したのも
此頃の事であつた。

著者が當時秀吉の陣中に忍び入つて敵狀を偵察
した記事は彼我の勝敗を卜するに屈竟の資料であ
る。

有時敵陣へ忍入テ見ケルニ、秀吉ノ陣ハ一段高
所ニ山陣ナカラ高棟アマタ作並へ、其真中ニ五
重ノ殿主ヲ揚ケ惣陣ヲ只一目ニ見渡ス様ニ作タ
リ、陣取ノ様ハ魚鱗鶴翼ニ取、雲鳥ノ陣ノ構ヘ
トソ見ヘタリ、サテ高松ノ責口ヲ見テアレハ、
北東ハ山也、西南ノ方ニハ堤ノ廣サ十間許、高サ
十二三間ニ築上、此方ヨリ寄ンスル方ニハ堀ヲ
塗、簀子ヲ結十間程ツ、ニ殿主ヲアケ、其中間
ニハ行燈ヲ一間ニ一充トホシ、内ニハ究竟ノ兵
共透間無居タリケリ、又城ノ方ニハ水瀆々ト湛

へ大海ノ如ナルニ、舟ヲ數百艘浮へ、是ニモ殿
主ヲ組、大筒小筒打、責寄ル時ハ貝鐘鼓ヲ鳴シ
惣陣ニ時ノ聲ヲ作責戰、略○中 良久爰彼ニ徘徊シ
若モアヤシメラレテ惡リナシト思ヒ、虎ノ尾踏
鰐ノ口ヲ遁レ忍出ケル、サレ其後ノ驗シト思ヒ
立タルノホリ三本引タクリ取テ歸リ、明ル日所
々ニ持廻リ、種々荒言シケレハ敵安カラヌ事ニ
ハ云ケル也、

美事に喰止められた毛利の援兵は鳥取の場合と同
じく城兵を見殺にするの外なかつた。「羽筑陣切崩
サレンコトハ案ノ内」など負惜みにも程がある。
斯くて兩軍の間に講和の談判が開かれると、六月
一日の本能寺の急變が突如として先づ秀吉の蛙鼻
の陣營に傳つた。問題はこれからである。

是時の秀吉の態度に關する史料は、彼れが此事
變を毛利に秘して和議の成立を急いだといふ説と
有の儘に打明けて敵の諒解を求めたといふ説との

二つに分れるが、著者は京都の變報を秀吉が一日早く受取つて安國寺惠瓊と祕密に交渉を遂げたといつて次の如く書いて居る。

然レハ羽筑ヨリ安國寺ヲ祕ニ呼テ、秀吉被仰ケルハ、我中國ヲ取ラント思ヒツル謀事ヲ見セントテ味方ノ衆ノ連判ヲ投出サレケル、此連判ニ洩タル人ハ五人ニハ不過ケリ、是ヲ見テ、安國寺肝ヲ消シ膝節ヲ振ハサレケル、其時筑前守云ハレケルハ、我如此行日本ニナシト思ヒツルニ毛利殿御謀言不_レ淺故ニ、信長既ニ果給フ、去ハ今ハ御三家ト和睦シテ天下ニ上リ、明知ヲ果而信長ノ恩ニ報セント思フ、被成御同心ヨト神文ヲ以テ宣イケル、若又無御分別ハ只今我カ簇ヲ向ナラハ此連判ノ衆其方ノ内ヨリ破ン事ハ不_レ可_レ廻_レ踵_レヲ被仰ケル、此時安國寺只一往ノ返事ニテ和平ニ成タル也トソ承及テ候、加樣ノ御武略ヲハ不知、不肖ノ者共ノ云ケルハ敵陣切崩

ンスル事ハ子細有間敷ニ、其上北登リケル羽筑ヲ追打ニセン事ハ太刀刀モ不入フミツブサンスルニナト、口キタナク申ケルハ上_ニ恐シキ事共也此記事は著者が傳聞のまゝを筆にしたものであるから必ずしも正確なりとの豫斷は出來兼ねる。安國寺惠瓊の彼我の間に斡旋したことは他の記録とも一致する。彼れは天正元年の冬、毛利の使節として上洛した時、信長の旨を承けて秀吉と堺に同道し諸共に義昭を諫めた事があつて、秀吉とは藤吉郎時代からの舊識であつた。今こそ敵味方に分れたれ出家の身の舊情を溫めて互に膝を交へて胸襟を吐露するに不思議はない。毛利側で秀吉に内通して居る數多き諸士の連判狀を投出したり、さては主君の一大事迄さらけ出して、脅しつ賺しつ一筋縄では行けさうにない老猾なる安國寺を烟にまくあたり、迨に豪懷放膽な秀吉ならでは見られぬ放れ業と思はれぬでもないが、餘事はさて置き

京都の變事を打明かした一事丈は猶ほ研究の餘地があるかと思はれる。第一、此戰秀吉側に十二分の勝味があつた。講和成立の希望が焦らずとも自然に陥落の日の待たれる秀吉側よりも、百計盡きて宗治に降参を勧めた毛利側に一層切であつたと言ふ迄もない。只宗治に腹をば切らせて城兵を助けやうとの鳥取の開城同一の條件を課せられたばかりに純忠なる部下を殺すに忍び兼ねて躊躇しつゝあつたに過ぎぬ。第二、六月四日宗治等主従七人は遂に敵陣に赴いて切腹した。其時の檢使が鳥取の時同様堀尾茂助其人であつたのも毛利に對して皮肉である。第三、やがて毛利は新に其國境を定められ、領土を割き人質を致すの條件に同意した。第四、秀吉が高松の陣を撤したのは六日であつたが、毛利側は隆景の桂、岡の兩人に宛てた書狀にも、其前日に早くも幸山河邊迄引返したことが見えて、「秀吉先拂毛利家之陣、心閑持成」云

々とある秀吉事記の記事を裏書して居る。信長の遭難を知つて居ながら、斯うも不利益な條件に屈服することが毛利に望まれたであらうか。第五、變報に接した後の秀吉は一層嚴重に京都方面から敵陣への交通を絶つことに努めた形跡がある。第六、彼れの書狀には（例へば十月十八日齋藤、岡本の兩人に宛てたものゝ如き）明らかに本能寺の變を祕して和を講じた事を告白して居る。第七、六月四日秀吉の輝元、元春、隆景三人に送つた血判起請文に見えた三條件の第一に

・一被對公儀御身上之儀我等請取申候條聊以不可有疎略事

とあるのもこれを證して居る。第八、前記六日附の隆景の書狀の如きはさも信長父子の變事を知つて居たかのやうに見えるけれども、吉川廣家の輝元に送つた慶長五年九月の書狀の一節に

先年高松之城太閤様御貴之刻、信長御生害之故

當方御和平被_レ仰談_レ御陣可_レ被_レ打入_二之折節_一、從_二紀州雜賀信長不慮之段體_一ニ申越候、下々申様ハ此時手を返、矛盾ニ及候者、天下則時ニ可_レ被_レ任_二御存分ニ處_一を、降景元春御分別違候與各被_レ申候得共、前日神文被_レ取替候辻無忘却_二被_レ相屆_一之段、太閤様御感被_レ成候而其故御當家干_二今如此御安堵之段_一隆景折々御物語候而御自慢之一ニ候、定而各も可_レ被_レ及_二聞召候間不及申候_一、

とあるに據つても、毛利が和議を締結する迄は京都の事變を知るに及ばなかつたこと、雜賀の味方から情報を得て破約論の沸騰したのは其の成立を告げて陣營撤退間際の出来事であつた事を最も雄辯に物語つて居るではないか。それにも拘らず、いきり立つ部下を取り鎮めた隆景が、知つた風を装うて居たのは辻褄が合はぬけれども、實は珍しくもない戰略上の習であつた。輝元が福井十郎兵衛尉に贈つた六月十日附の書狀に「此表之儀羽柴

頻ニ懇望候之條、令和談候、殊信長父子三人明智以行討果候」云々としら／＼しく書かれて居るのも亦同様である。きはざいところで敵の手に乗せられた毛利側としてはさうとても言はねば立つ瀬がなかつた。それにしては和議締結後に其取消を望んだ動機は何んど説明する積だらう。

是迄は敵味方双方の史料を對照して公平に判斷しやうとする史家の略一致するところであるが、私はこゝに一つの新しい見解として、秀吉が安國寺に丈口留をした上で京都の凶變をもらしたものと見たい。巧みに秀吉に買収されて、宗治の切腹を獨斷で取計つた程の彼れとしては一步を進めて和議の迅速成立の爲め主家に向つて此一大事の秘密を知らぬ顔に取り濟ます位は何んでもなからうやがて山崎の戦後毛利から秀吉の成功を祝する爲めに京都に派遣された彼れが在國の同僚に送つた書狀の一節に、

一藝州各様御分別ハ於岩崎陣被_レ仰定候ハ、信長御出と申ニ付候而こそ被_レ作御神文にて候、今又對秀吉候而ハ御約束もさまで無之候事、と見えるのは元春隆景等が信長を存生と見て和約を結んだことにはならうけれども、安國寺丈が其死を知つて居たとして一向差支はない筈である。太閤記などに秀吉が京都の變事を毛利に告げたとするのは此事を誤り傳へたものではあるまいか。

これより後の安國寺が秀吉のいみじき信任を蒙り縋衣の身を以て樞機に參畫して居つたことなど思ひ合されるふしぐがないでもない。斯う思へば本書の記事は大體に當を得たもので、「此時安國寺只一往ノ返事ニテ和平ニ成タル也トソ承及テ候」どの一句にも、彼れの隠れたる微妙の苦心を偲ばせる。

關原役について、著者は秀吉の他界から天下が暗闇になつて諸大名は秀頼に別心なきを誓ひなが

ら互に心を置き疑を成しつゝあつた間に、家康の傍若無人の振舞が三成の放逐、上杉の征伐となり輝元が反家康黨に加擔して廣島を立つたことから秀頼方とも見えす家康方ともつかず、勝つた方に參らんと只管形勢を觀望しつゝあつた諸大名も、京方の敗北に決してからは太閤多年の恩誼をも忘れ、家康方に與みして京都へ攻め上り、中國衆も敗れて大阪へ引き退き、輝元は無二の秀頼方であつた爲に戰後其領土を削られて僅に防長二國を與へられたことなど逐一其經過を叙した後、さも力なげに「是モ只時代移替タル世の習也」とあきらめの筆を投げて居る。

而かも事實上の大阪方の統帥であつた輝元が全領土の沒收を免れて、二國でも喰止め得たのは主として吉川廣家の宗家に對する不斷の熱烈なる運動のお蔭であつた。彼れは初から輝元が大阪方に擁せられたのは安國寺等にたばかられたもので、

決して其本意でないといふ事を極力辯護して家康の諒解を求めるに力めつゝあつたが、家康が岡山に着いた頃、安國寺や長束正家と共に南宮山に陣取つて居た廣家は輝元は勿論安國寺をも出し抜いて毛利の家老福原廣俊と申合輝元の和議(實は降伏)の手續を濟ませたのである。茲に哀れをこめたのは安國寺で、それとは知らず、頻りに敵との手合せを焦つたが、廣家廣俊の兩人は能程にあしらつて手出しをさせぬ中に、天下分目の軍さは味方の大敗北に終つたのである。其時の事を廣家の書狀に「長大(長束大藏大輔の略)安國寺は人數でたがり候つれども、兩人面白おかしく申候て、人數出候はで敵手ふり聞合申候處ニ、案ノ中、山中(關原)之儀即時被乗崩悉被打果候」云々といつて居る。多智多謀の安國寺を「面白おかしく」翻弄した兩人も人が悪いが、高松の和議に主家を出し抜いた報いとすれば、彼れも亦諦めずばなるまい。

それにつけても笑止千萬なのは樂觀から急に悲觀に落ちた毛利の主従である。著者の僞らざる告白は這般の曲折を窺ふに充分と思ふから、少しく長いが原文の儘を左に

世間加様ニ可成行事ハ不知、最所(初)弓矢ノ始ケル時ハ、秀頼様御勝有ヘキ事ハ眼前ナレハ京方シタリケル大名ハ彌可預御恩ニモ、然ハ殿様ハ天下ノ御守護ニ可有御成ト上下万民思ヒテ浴中ノ者モ諸國ノ侍モ馳走奔走セサル者ハナカリケリ、我等如キ數ナラヌ者モ人ニ可成ト思ヒ心ノ所及馬鞍鎧武具結構ニ誘ヘ、一騎當千ノ手柄ヲ可盡ト思ツテ居タリ、馬ハ栗毛ノ長四キ餘リ有テ、カケハヤ道ニ及フ馬ハナシ、作ノ鞍ニ紋ハ金ヲ以テ洲輪間方ニ岩石ヲ入タリ、轡昔明珍也、小筋ノ手繩ヲヨリ懸ケ、虎皮ノ鞍覆、半熊障泥、眞紅ノ房尻懸、金地ノ鎧也、具足ハ例シ實ヲ糟漆ニ塗セ、胸板ニハ〇ノ内ニ勝ト云字

ヲ如何ニモ大ニ金ニテ入、草摺ヲハ黒漆ニシテ、紫糸ニテ綴シタリ、同毛ノ袖ニ、甲ハ左折ノ烏帽子ニ鬼面ヲ立テ、シコロハ五枚下リ白糸ニテ綴シ膝當テハ赤ク塗せ、鐵ノ筋金ヲ伏せ、脇楯ハ黒膝ニシテ、紫糸ニテ綴シ、金ヲ以テ蛇ノ目ヲ置セタリ、差物ハ紺ノ切懸也、内ノ者共ニハ赤猩々皮ノ半折ヲ着セケリ、加樣ニ支度シタリケレ共、御弓矢思ヒノ外ニ成行ハ役ニモ不立、其上防長計ニ成ケレハ、御家中皆十分一、廿分一或ハ御放ノ衆モ多カリケリ、我等式ニハ屋敷分計防州佐波郡德地ニテ被下ケル、三代相恩ノ事ナレハ、千石万石共存也、然間尙以忠勤怠ル事無リケル、

勝敗の打算を誤つた結果とはいへ、何んたる喜劇で又悲劇であらう。其前半の記事に微笑を禁じ得ぬ讀者も、後半に至つて譜代の恩誼を思ひ、あてがはれた小祿に甘んじて、而かも千石萬石とも存

ずると書いた著者の心中を察しては、一掬同情の涙を催さぬものはあるまい。

大阪陣は六十三歳の條に見えて居るが、當時著者は隱居の身であつたから其記事は傳聞の儘取り輯めたものに過ぎぬ。只四十六歳の條に著者が關原陣を叙した後、

内府、(家康の事)秀頼ヲ左右ナク可押事モ諸大名ニ尙モ心ヲ置テ不相成、秀頼ヲ守護スルフリニモテナシテ、色々ノ馳走顔ヲシ、結句將軍ノ聲ニ取り、種々タハカリ議テ、七八年カ程コン有ケレ、と書いて居るのを始めとして、六十三歳の條には家康父子が大阪城を攻めあぐんで、面白咲くたばかり、一旦和議を調へて引きながら、偽つて二三の丸を崩し、改めて攻め寄せたことを叙した後ち、

其後御所將軍ハ石山ヲ責落シ、年來ノ望ヲ達シ日本ヲ掌ノ内ニシ、傍ニ人無カ如也、一家ノ人

々ニ國ヲ與ヘ又忠有ツル輩ニ恩賞ヲ行、子孫長久ノ御樂ミトソ聞ヘケル、

といった著者の感想は家康の大阪陣が、豫定的行動として一般に頗る不人氣であつたことを物語つて居る。

交通史の史料として

二十四歳の條に、著者が天正九年世間の靜謐を機として伊勢參宮を試みた記事が見えるのは當時の交通史料であると共に亦信仰史料でもある。然るに私は本書の此記事を見ると前後して偶然にも略同時代の地方武士が同一の目的を以て上方の旅行を試みた紀行二編を見ることが出來た。一つは伊豫の三間城主として勇名を轟いた西園寺家の家臣土居清良が、天正元年高野參詣から伊勢へ廻つた時の紀行で、清良記に見えて居り、一つは同じく西園寺家の支流同國板島九串城主西園寺宣久が伊勢參宮の時海陸の記として宇和雜記（二）に收めら

れて居る天正四年の紀行である。是等の三つの紀行は（第一）清良記を別として皆戰國の武士たる著者の筆すさびに成つた物である上に、（宣久のは拔萃ではあるが）（第二）年代も餘りに隔つて居らず、（第三）一つは安藝二つは伊豫から鹿島立して上方に旅行したなど、共通の點もあつて、彼是併せ考へると研究上得るところが少くない。

先づ第一に考ふべきことは、旅行の動機であらう。宣久の紀行は抄録の爲めかこれに關した記事が見當らぬけれども、清良は戰場の露と消えた父の佛事を營む爲に高野參詣を志し熊野から伊勢參宮をした者で、初めは阿波の三好長治と戰ふつもりで道後迄出陣したが、長治の上洛した爲めに其儘陣地から出發して居る。玉木吉保は前にも説いた如く其祖先が熊野に住して玉置大明神といはれ八人の王子が八王子であるとの家傳に基いて、熊野を先祖の鎮守と見、參詣の今日の衰廢の末類を

憐み、武運長久、子孫繁昌、富貴大自在諸人愛敬を得んことを祈つて居る。高野詣も先祖の位牌を拜まうとするのが、一つの目的であつた事は言ふ迄もない。神宮にては神樂を奏し初穂を捧げたことを書いて、「南無天照大神は伊弉冊伊弉諾尊、寶祚一切衆生ノ父母ト傳承ル、我モ子ナレハ官祿ヲ授給ヘト深ク祈念シテ下向シタルケル、古歌ニ、天ノ戸ヲ押明方ノ雲間ヨリ神代ノ月ノ影シ殘レルト云御歌ノ心ヲ思合セテ忝テソ下向シタリケル」といひ天照大神を伊弉諾伊弉冊尊と混同して居るが皇室の御祖神であると共に人民の父母でもあらせられるとの信念は當時の神宮信仰に於て注意すべき事であらう。清良も土居氏が紀伊國牟婁郡の土居を本居とする所から、代々熊野三山を城中に移し祈禱山伏三人を置いて日參を怠らせなかつた程であつて、清良の熊野本宮に詣でた時は自から當所彌陀如來の下臣といひ、特に三山權現の冥助を祈

つた上、先祖の舊里、木本の土居に立寄り、神宮へ詣で、居るが、高野へ登山してから、彼れは六親を始め三代以來討死の被害者の爲に一萬本の佛を立てさせ病死者の爲にも二千本の供養をして居る

吉保は「上方ハ關モ無何ノ障モ無シ」といつて、姫路で秀吉の出陣を見物したのを始め、行く先々で氣樂な旅行を續けて居る様、戰國の世とも思はれぬけれども各地到る處に戰爭が行はれて、交通の杜絶され勝であつた上に、警察機關の不備に乘じて、山賊海賊の跋扈した當時の旅行は決して容易のものでなかつた。此旅行に吉保は同行二三人と小者一人宛を具して順禮姿に出で立つたが清良は部下の侍二十七騎雜兵百六十人一行中の櫻井武藏を大將に仕立て、武者修行の風を裝うた。吉保は往路は陸路を選び歸路堺から船出して居るが水陸の危險については何事も語つて居らぬけれども、清良は來島飛驒守から「當時海上は海賊多し

て、ここのほかむつかしく候」といはれて海賊に對する種々の注意を受け、船五艘に分乘して來島瀬戸を漕ぎ出した後も、瀬戸内海に於て幾度か海賊に襲はれ、其都度鐵砲にて打拂ひながら大阪轉法へ上陸して居る。轉法は即ち傳法口であつて一般には豊臣氏になつて開かれたといはれるけれども實は同氏以前からの大阪の埠頭であつたことはこれでも知れる。宣久も往路には瀬戸内海の港泊を縫うて航海を續けたが備後の鞆あたりでは安藝の警固船五十艘許に護衛され、播磨の英賀^{アカ}に上陸してからも小寺官兵衛尉に志方迄の案内者を附けられ三木に向ふ途中、三日前に山伏が山賊と戰つて相果てた六神荒神と申難所にさしかゝつた。是等は何れも當時海陸の旅行に危害の伴ふことを偲ばせるものである。

吉保は六月十二日に國を立つて、十八日に姫路に着き、一日逗留して秀吉の出陣を見、廿四日に

上洛して洛中洛外の見物に五日間を費した。清良は河内金剛山に其昔「日本を引請たる楠」の跡を尋ね高野熊野を経て伊勢に參詣し、京に上つて残らず見物した上愛宕へ登山して居る。宣久は三木から生瀬に出で、池田、大田、山崎を経て上洛し諸所の見物に數日を送つた。

吉保は京都から更に近江に入つて安土城を觀、多賀大明神に詣で、鈴鹿越をして七月三日に山田に着いた。安土山は信長に築城の意圖があると聞えた頃清良も一見して居る。多賀社の祭神は天照大神の父神にましますところから、伊勢參宮者の參詣する習である。宣久も京都から大津に出でたが、草津から石部、水口、土山、猪鼻を経て鈴鹿を越え掠原（掠本か）安濃津、田九等の各地を経て山田に着いて居る。

山田では吉保は高向二頭太夫の邸を宿坊として外宮内宮に參詣したが、神前へは多くの人數を伴

うて馬をうたせ、神樂御初穂を奉納した。高向は昔からの由緒ある檀那丈にしきりと馳走したとの事である。清良も其御師橋村織部太夫正珍が彼れの參宮と聞いて、山田から五里三里づゝ迎のものを出しさまゝの待ち儲けをした。宣久は又西河原の足代民部丞の許に着いた後、囃などして旅情を慰めて居たやうである。斯る御師の心づくしの歡待が、次に説く高野の聖のそれと共に、民間多數の參拜者を引きつける魅力のあつたこと言ふ迄もあるまい。猶ほ宣久は參宮して天岩戸を拜み、又西河原へ歸つて大神樂をあげて居るが、それには巫十八人、太夫十三人都合三十一人行はれたやうに書いて居る。

參宮を濟ませた吉保は更に熊野に向つたが、其間道連となつた道者の總數三百餘人に上つたといふにつけても、戰國の民間信仰を卜することが出来やう。七月十日に新宮へ着き、那智から本宮へ

と歩を運んだが、十四日には更に高野へ登つて先づ奥院に詣で、大師の廟を拜した。大師の入定について彼れは、「御入定ノ意趣ハ不生不滅不垢不淨不憎不滅ト云御心中ヤ覽、御密宗ノ上難知御事共也」と申して居る。こゝでは彼れは昔ながらの大檀那として先祖の位牌を安じて居る實相院の藤坊を宿坊としたが志納金の甲斐あつて聖の歡喜斜ならず、十六日彼れが下山のも折も態見送りに下つたとの事である。清良は路程をそれと逆に取つて高野から熊野、山田へ參つた、高野では小田原上藏院に着いたが、是時住持慶算の紹介で、兵法者上原柳身に遭ひ、上原は清良の家臣水邊治部と劍法の仕合に打負かされた挿話がある。

吉保は其後高野から和泉の堺に出で、船に乗り往復に約四十六日を費して七月二十八日に歸國して居るが、清良は山田から安濃津、安土、京都を経て大阪に出で、數日の滞在に良馬を購ひ、やが

て乗船して歸城した。宣久は伊勢から伊賀越をして大和に入り、初瀬より奈良に入り、八幡、天神馬場、大田、生瀬の各地を経て湯山に出で數日逗留して後、もと來た道を辿つて歸途に就き英賀から乗船して歸國したのである。

私はこれから尙ほ身自鏡に據つて朝鮮との交通

路を附け加へ、更に道徳史料及び經濟史料としての同書を紹介した後、近世の初期に入つて戰績ある故老の間に自叙傳流行の風のあつた事實を舉げてそれらの二三のものと比較して見る豫定であつたが、餘りに多くの紙面をふさいだから姑くこゝに筆をおくこととする。

庄園制度崩壊の一例としての 越前國河口坪江庄の研究 (上)

牧野信之助

地方史を取扱ふ上に於て普通に中世と云はれる

ことが至當であると考へる。

時代は一面之を庄園時代と稱すべき理由を有つてゐる。庄園の起源は別段穿鑿するまでもなく既に奈良朝には充分にその發達の蹤を見るべきでありその結末に至つては先づ安土から桃山時代に置く

此の九世紀に亘る長時期の間殊に大化以降奈良朝から平安朝の初期にかけて二世紀の間律令の公布は表面頗る精密に亘つたことであるが若しそれが條文の示す如く實行せられたならば庄園の出現